ラスベガスをぶっつぶせ

2008（平成20）年4月23日鑑賞〈ソニー・ピクチャーズ試写室〉 ★★★★

監督＝ロバート・ルケティック／原作＝ベン・メズリック『ラス・ヴェガスをブッつぶせ！』（アスペクト刊）／製作＝ケヴィン・スペイシー／出演＝ジム・スタージェス／ケヴィン・スペイシー／ケイト・ボスワース／ローレンス・フィッシュバーン／アーロン・ヨー／ライザ・ラピラ／ジェイコブ・ピッツ（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2008年アメリカ映画／122分）

……あなたは、ブラックジャックのルールを知ってる？　あなたは、バクチが好き？　数式が好き？　確率論が好き？　その答えがイエスの人は、この映画にハマるかも……？　ブラックジャックはバクチ？　それともビジネス？　一見物騒なタイトルのこの映画が描くのはそれ！　数式の天才たちの快進撃は痛快だが、その先に待つものは……？　行き着くところは人間力、そんな実感がしみじみと……。

カード・カウンティングとは？

いかにも物騒なタイトルだが、これは、理科系大学として世界的に有名なマサチューセッツ工科大学（MIT）の秀才ベン・キャンベル（ジム・スタージェス）に目をつけたミッキー・ローザ教授（ケヴィン・スペイシー）と、そのチームに属する4人の学生たちと共にラスベガスに乗り込み、バクチではなくカード・カウンティングという「必勝法」によってブラックジャックで大もうけをするという物語。

世の中には「パチンコ必勝法」なるものが出回っているらしいが、この映画がみせるブラックジャックにおけるカード・カウンティングは、そんな眉唾もの（？）ではなく、実在の人物と実話を基にしたものというから驚き。ブラックジャックは単純なゲームだが、そこまで極めるとそりゃ楽しいかも……？　しかして、カード・カウンティングとは……？

主人公のプロフィールは？

ハリウッド映画初主演となったジム・スタージェスが演じた主人公ベン・キャンベルの夢は、MITを卒業した後、母親の夢でもあるハーバード大学医学部へ進学し、医師への道を歩むこと。ところが、そのためには30万ドルの学費が必要なため、母子家庭のベンにとっては、優秀な学生たちの中からたった1人だけ選ばれる奨学金をもらうことが不可欠。

今日はその面接の日だが、面接官からは「何か特別アピールするものがなければ……」と迫られ、ベンは困惑中。だって、勉強して、バイトして、オタク系の親友たちのロボットコンテスト用の工学ロボの研究をすることに明け暮れていたベンには、人をアッと驚かせるようなアピール力など何もないから……。

ここまでの導入部を観て私が不思議に思うのは、なぜMITを優秀な成績で卒業できるベンが、今更ハーバード大学医学部に進学するの？　ということ。それなら最初から医大に進めばいいのでは……？　また、いくら名門のハーバード大学医学部を卒業しても、名医になれるかどうかは別問題だから、MITでトップの秀才を誇っているのなら、グーグルでもマイクロソフトでも引く手あまたなはず。また、入社後の立身出世と高給取りも思いのままでは……？　その点、この映画のモデルとなったというMITの天才学生ジェフ・マーのプロフィールはどうだったのだろうか……？

ミッキー・ローザ教授の求心力がポイントに！

日本の大学や法科大学院の授業風景に比べると、ハリウッド映画に登場する大学の授業風景は実にうらやましい。つまり、教授の講義の内容やスタイルが工夫されており、充実しているということだ。私はミッキーの授業風景をみて、それを再確認。

そんなミッキーに対して、ベンは天才的な数学力の持ち主という強烈な印象を与えたため、ある日ミッキーの「特別研究」の場に招かれることに。そこに集まって、ミッキーの指導のもとにブラックジャックの勝ち方の研究をしていたのが、①ジル・テイラー（ケイト・ボスワース）、②チョイ（アーロン・ヨー）、③キアナ（ライザ・ラピラ）、④フィッシャー（ジェイコブ・ピッツ）という4人の学生。ミッキーの説明によると、ラスベガスに乗り込んで彼の言うカード・カウンティングの理論を活用し、かつチームとして冷静にプレイすれば、必ず大もうけすることができるというわけだ。

そして、そのために必要なのは数学の天才だが、それまでプレイヤーを務めていた天才学生が就職してしまったため、その後釜としてベンに白羽の矢が立ったわけだ。

工学ロボ仲間とのロボットコンテストに向けた準備やバイトの予定があるからムリだと一度は断ったベンだったが、ある日バイト先に大学一の美女ジルが誘いにくると、ついその気に……。もっとも、この時点でベンは、学費に必要な30万ドルを稼げばすぐに足を洗うと宣言していたが……。

それはともかく、これによって来たる8月8日に開催される北京オリンピックに乗り込む「星野ジャパン」のようなドリームチームが結成されたわけだが、そこでは星野ジャパンの星野仙一監督と同じく、何よりもミッキー・ローザ教授の求心力がポイントに！

ちょっと誇張しすぎでは……？

ブラックジャックのルールはほとんどの人が知っているはず。しかし、私にとってブラックジャックはポーカーと共にあまりにも単純すぎるためバクチとしてあまり面白くないゲーム。私はブラックジャックよりむしろジャンケン「バクチ」の方が面白いし、カードのゲームなら何といってもナポレオンが面白い。また、ゲームとしてもバクチとしても最高に面白いのが、やはりマージャン。

それはともかく、プレスシートには、①「ブラックジャックに関して……」、②「カード・カウンティングに関して……」という2つのコラムがあるし、③「原作者ベン・メズリック×元MIT学生ジェフ・マー」のインタビュー、④東海大学教育開発研究所所長で数学者の秋山仁氏の「数学理論とブラックジャック」というCONTRIBUTION（寄稿）がある。したがって、これらをしっかり研究すれば、「カード・カウンティング」によってブラックジャックで勝つ確率が理解できるはずだ。

しかして、④によると「資金提供者に30％を下回ることがなかった」から「株の方がブラックジャックよりずっとギャンブルだ」とのことだが、それなら3割5分の打率を残すイチローの方が確率が高いのでは……？　したがって、この映画にみる、連戦連勝でみるみるうちに何十万ドルも獲得していく姿は、ちょっと誇張しすぎ……？

こんなワンパターンでいいの……？

ラスベガスのカジノには、『オーシャンズ13』（07年）でもよくわかるように、カジノ荒らしを防ぐため各所に監視カメラが設置され、違反者の取締りに目を光らせている（『シネマルーム15』28頁参照）。この映画に登場するその道のプロがコール・ウィリアムス（ローレンス・フィッシュバーン）だ。彼はかつてミッキーによって痛い目にあわされ、カジノをクビにされたという体験をもっていたから、ミッキーの「カード・カウンティング」理論にも十分な理解力と対応能力をもっていた。

この映画で見せる「チーム・ミッキー」の、バクチではなくカード・カウンティング理論によるブラックジャックの勝ち方は、あくまで確率にもとづくもの。したがって、本番での多額の勝負に臨むにあたっては、予行演習として少額の勝負によるデータをチームとしてプレイヤーに伝えることが不可欠。それが合法的なのか、それとも集団的詐欺なのかは難しいところだが、チームとしての情報の伝達に各種の暗号や合図が活用されるのは当然。プロ野球でもかつて乱数表というものがあったが、これはかなり複雑。また、ベンチから選手に伝えられるサインプレーも結構複雑だから、頭の悪い選手は時々それを読みまちがえることもあるほど……？

ところが、この映画でミッキーが指示する暗号や合図はわりと単純だから、私でもすぐに覚えられるもの。そのうえ私が大問題だと思うのは、最初に決めた合図をワンパターンのまま何回も使っていることだ。プロ野球だって、サインは数試合ごとに変更しているはずだから、天才が集まって何十万ドルも稼ごうとするカジノの大勝負で、こんなワンパターンの合図を何回も使っているのはナンセンス。これではいつか見抜かれるのでは？　と心配していると、案の定コールの眼力は……？

順風満帆が続かないのは世の常……

この映画を監督したのは、『キューティ・ブロンド』（01年）でリース・ウィザースプーンの魅力を全世界にみせつけたロバート・ルケティック監督。彼はベンの人物像とミッキーの人物像を丁寧に描く中で、チーム・ミッキーがまさに「ラスベガスをぶっつぶ」していく様子を小気味よく描いていく。

しかし、そんな成功がエンドレスに続くはずがないのは、誰でもわかること。成功を続けていく中で必然的に起きるちょっとした油断やミス、そしてチーム内の対立や

亀裂。そんな事態が起きるのは、人間が集まったチームである以上仕方がないものだ。ミッキーにとって、ベンに嫉妬したフィッシャーの脱落はある意味想定の範囲内だったが、あれほど冷静沈着で「数式がすべて」を地でいった、自分の生まれ変わりだと信頼していたベンが、ある日大チョンボをやらかしたのは全くの想定外！　そして、そんな中ではじめて、それまでクールでスマートだったミッキーの本性も明らかになることに。

他方、ここまで数々の修羅場を体験してきたベンも、かつてのウブな天才学生ではなくなっていたから、ミッキーと決別した後、ベンは新たに「チーム・ベン」を結成し、ミッキー方式を踏襲したまま勝利を目指したが、そりゃちょっと甘すぎるのでは……？

ロバート・ルケティック監督が問おうとしたものは……？

原点に戻って考えてみれば、ベンは30万ドルの学費を得るため「チーム・ミッキー」に参加したはず。ところが、今や毎週、週末になればラスベガスに乗り込んで荒稼ぎをし、贅沢三昧の生活をしているではないか。やはり人間はここまで堕落するもの……？　しかもタチが悪いのは、当の本人はロボ仲間から見限られたことや、母親に対して奨学金をもらえたとウソをついていることを、「まあ仕方ないか」と居直ってしまっていること。つまり、カネが人間の心をまどわすのは、凡人でも秀才でも変わりはないということだ。

しかし、コールによって「チーム・ベン」のチームプレーとカード・カウンティング作戦が見破られたら、その先に待つものは……？　映画はここから佳境に入っていく。そして、ロバート・ルケティック監督がこの映画で問おうとしたものの姿も少しずつ見えてくるはず。そんな根源的な問いかけはじっくりとあなたの目で……。

やはり、所詮行きつくところは人間力。私の実感はそんなところだが、さてあなたの実感は……？

2008（平成20）年４月24日記